

東京有明医療大学附属接骨センター活動報告

－開設8年目を迎えて－

成瀬 秀夫 山口 登一郎
 小山 浩司 福田 翔

I. はじめに

2009（平成21）年4月、保健医療学部（鍼灸学科・柔道整復学科）と看護学部（看護学科）の2学部3学科よりなる東京有明医療大学が開学した。開学から約2年後、東京有明医療大学の附属医療施設として、2011（平成23）年1月に附属鍼灸センター、2011（平成23）年3月に附属接骨センター、2011（平成23）年5月に附属クリニック（内科・外科・整形外科）が開設された。2011（平成23）年3月14日に開設した東京有明医療大学附属接骨センター（以下「接骨センター」という。）は、本年8年目を迎えている。そこで、今回これまでの活動報告および今後の課題について考察する。



櫻井康司理事長



佐藤達夫学長

II. 接骨センターの開設

思い起こせば、2011（平成23）年3月14日の10時～11時に江東区豊洲・東雲・有明連合会会長 細野昌宏氏、学校法人花田学園 櫻井康司理事長、東京有明医療大学 佐藤達夫学長（現 名誉学長）などにご臨席を賜り接骨センターの開設式典を行った（図1）。

開設式典当日は、2011（平成23）年3月11日14時46分頃発生した東日本大震災（発生時点において日本周辺における観測史上最大の地震）の3日後であり、式典の最中にも幾度か余震があったことが思い出される。大震災に伴い国の施策として計画停電の実施および節電の要望が出され、これらの諸事情を考慮して、3月31日まで休診とする決定をした。先行きに多少の不安を感じながらのスタートとなった。

接骨センターの面積は、専用の施術室が104.00m²、待合室が98.75m²で、この隣にはカンファレンス・ルームも完備し、臨床実習施設として、あるいは地域の健康保持に貢献する医療施設として十分な広さを有している。設備機器として、運動器疾患に対して、より適切な評価を補助的に行う超音波画像観察装置、施術のための物理療法機器として干渉波治療器・TENS・超音波治療器・マイクロ波治療器・超音波浴治療器・ホットパックなど、



附属接骨センター見学風景



図1 附属接骨センター開設式典

固定材料として包帯・テーピング・綿花・厚紙副子・すだれ副子・金属副子・ギブス・熱可塑性キャストなどを備えている。

Ⅲ. 接骨センター開設の目的・必要性

接骨センターは、柔道整復学科やアスレティックトレーナーコースにおける学生の臨床実習の場として重要な位置を占めるとともに、卒業研究や、さらに臨床教員の技術・技能の維持向上等、教育研究を実施するために必要不可欠な施設である。そのため、大学附属の接骨センターを整備し、教育の質の確保に努める必要がある。

(1) 柔道整復学科における臨床実習施設としての接骨センターの必要性

本学柔道整復学科の臨床実習は接骨センターでの実習を中心に、さらに学外の整形外科・接骨院での実習を加え2年次、3年次及び4年次に実施される。2年次では、接骨センターにおいて、医療人としての倫理観、態度、マナー、受付対応法、医療面接、施術録の記入法を学び、さらに物理療法機器の理解・体験、模擬患者トレーニングなどを実施する。3年次及び4年次では、指導教員の指導の下、接骨センターにおいて柔道整復師が行う問診・視診・触診・徒手検査・超音波画像観察装置などによる評価法、施術録の記入法などを見学し、また、どのように治療を進め、指導管理するか、さらに医療連携などについて見学実習する。柔道整復学科の学生が有意義な臨床実習を経験するため、また、カンファレンス（症例検討）において、実習日当日の症例のみでなく、それに類似した症例、鑑別すべき症例との比較学習、さらに稀に経験する症例などについての検討をするためにも、十分な症例数を確保し臨床実習の充実を図る必要がある。

(2) アスレティックトレーナーコースにおける臨床実習施設としての接骨センターの必要性

本学に設けられているアスレティックトレーナー

コースの履修カリキュラムでは、1年次後学期から「現場実習」が開始され、スポーツ現場や関連する医療機関等（大学附属臨床施設）において段階的に学ばせることが必要である。

1年次後学期に実施される『現場実習Ⅰ（見学実習）』において、大学附属臨床施設の見学実習を通して、スポーツ現場と医療機関等との連携方法やアスレティックトレーナーが担当する役割について学ばせる。

(3) 柔道整復師有資格教員の研修施設としての必要性

柔道整復師免許を有する大学教員は、教育・研究とともに臨床実務が不可欠である。教員が技術・技能の維持、向上に努めることは、教員のスキルアップに繋がり、教育・研究にも反映される。教員の研修施設として効果を発揮するためには、接骨センターにおいて、多くの症例経験を経ることが望まれる。

(4) 地域住民の健康保持に貢献するための必要性

東京有明医療大学の附属医療施設として、附属クリニック（内科・外科・整形外科）および附属鍼灸センターとともに、地域住民の健康保持に貢献する必要がある。

Ⅳ. 接骨センターの現況

接骨センターは開設以来、施術管理者および勤務柔道整復師とともに、すべて東京有明医療大学保健医療学部柔道整復学科専任教員が担当している。

(1) 開設時（平成23年4月）から今日（平成30年7月）までの月別来院患者数の推移（表1）をみると、徐々に患者数が増加してきており、とくに平成30年5月より急増している。

(2) 平成29年9月～平成30年7月の世代別来院患者数（図2）をみると、来院患者582人のうち、10歳代が128人（22%）と最も多く、次いで70歳代が106人（18.2%）となっている。10歳代ではスポーツに起因するものが多く、70歳代では転倒など加齢の影

表1 平成23年4月～平成30年7月の来院患者数の推移

単位：人

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成23年	—	—	—	22	51	57	72	39	57	89	113	125
平成24年	60	55	41	74	141	206	159	65	59	112	90	85
平成25年	91	68	38	55	75	96	79	69	76	73	93	112
平成26年	64	53	85	76	154	132	124	47	52	89	80	53
平成27年	49	74	89	136	124	193	147	76	89	96	93	108
平成28年	79	66	63	74	63	102	131	97	98	110	123	115
平成29年	99	80	79	96	101	174	163	116	120	180	234	172
平成30年	144	158	134	200	332	360	365	—	—	—	—	—

患者数 (人)

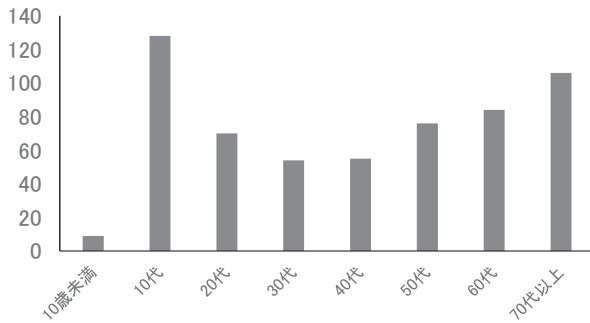


図2 平成29年9月～平成30年7月の世代別来院患者数

患者数 (人)

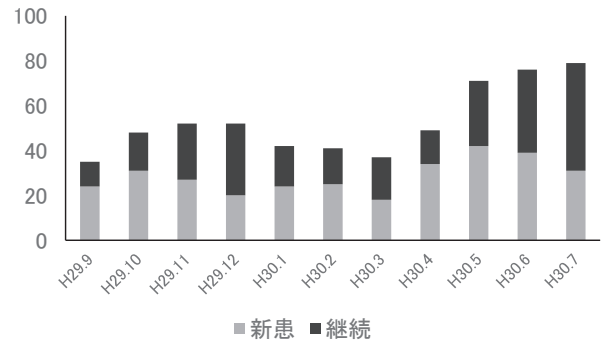


図3 平成29年9月～平成30年7月の新患・継続来院患者数

響と思われるものが多い。

- (3) 平成29年9月～平成30年7月の来院患者（新患および継続患者）のうち新患の占める割合（新患率）をみると（図3）、平成29年9月：68.6%、10月：64.6%、11月：51.9%、12月：38.5%、平成30年1月：57.1%、2月：61.0%、3月：48.7%、4月：69.4%、5月：59.2%、6月：51.3%、7月：39.2%で、新患が継続患者を上回っている月が多くを占めていた。
- (4) これまでの来院患者の傷病についてみる。骨折・脱臼については、医師の同意の下あるいは医師からの後療法の依頼を受け施術を行っているが、これまで肋骨骨折、鎖骨骨折、肩峰端骨折、上腕骨骨幹部骨折、上腕骨顆上骨折、橈骨頭骨折、コーレス骨折、尺骨茎状突起骨折、橈骨骨端線離開、手指の骨折、脛骨近位端部骨折、腓骨外果骨折、踵骨粉碎骨折、第5中足骨骨折、足趾骨折、椎体圧迫骨折など、脱臼では肩関節脱臼、肘関節脱臼、手指の脱臼、膝蓋骨脱臼、足関節の脱臼骨折などを経験している。また、捻挫では足関節捻挫、膝靭帯損傷・膝半月板損傷などの施術を行っている。

V. 大学附属の接骨センターとしての使命

大学附属の接骨センターとして、以下のことを心がけている。

- (1) 患者に対して、より適切な評価を行うこと。問診、視診、触診、徒手検査を主体とし、補助的に超音波画像観察装置を用い、より確かな評価を行う。
- (2) 患者、あるいは保護者などに対し、丁寧なインフォームド・コンセントを行うこと。
- (3) 確かな評価、インフォームド・コンセントにより、患者が適時・適切な医療を受けられるようにすること。
- (4) 柔道整復師の業務範囲を遵守すること。
- (5) 治療にあたっては、伝統的な柔道整復師の整復・固定の技法を用いると共に、必要に応じ、近年の優

れた固定材料なども併用すること。

- (6) 患者が適時・適切な医療を受けられるよう医接連携を図ること。現在、東京有明医療大学附属クリニック、順天堂大学医学部附属順天堂東京江東高齢者医療センター、昭和大学江東豊洲病院などの医療機関と連携している。

VI. 今後の課題

東京有明医療大学が完成年度を迎えた2013（平成25）年4月に大学院保健医療学研究科修士課程（前期課程）、その2年後の2015（平成27）年4月には大学院保健医療学研究科後期課程（博士課程）が開設された。どちらの課程も鍼灸分野と柔道整復分野からなるが、柔道整復分野の研究により修士（柔道整復学）あるいは博士（柔道整復学）の学位の取得を目指す者は、柔道整復学の向上に寄与する研究をするとともに、柔道整復師の臨床現場を理解しておくことが不可欠であり、そのため、研究の傍ら接骨センターでの臨床研修が必須である。また、2015（平成27）年9月、東京有明医療大学がモンゴル国立医療科学大学と大学間国際協定を締結し、これに基づき2016（平成28）年9月開学したモンゴル伝統医療国際学校・伝統医療セラピスト学科において、本学柔道整復学科教員が派遣され、柔道整復学理論・実技を講義しているが、今後、モンゴル伝統医療国際学校で柔道整復学・柔道整復術を学んでいる学生の臨床実習の場として接骨センターが中心になる。このように柔道整復学科やアスレティックトレーナーコースの学生だけでなく、大学院生、モンゴルからの留学生などに充実した有意義な臨床実習を経験してもらうためには、さらなる患者数の増加、症例数の増加が喫緊の課題である。接骨院は下町では馴染みがあり、気軽に来院する傾向がある。有明という地域特性もあり、当初、患者数が伸びない月日が続いたが、近年、少しずつ患者数の増加がみられ、平成30年5月より急増している。その要因のひとつとして、近隣の方々からの

ご紹介があげられる。さらに優れた評価・施術により地域住民のさらなる信頼を得て地域貢献を果たして行きたい。また、当接骨センターは江東区災害時医療救護活動従事者登録をしており、江東区総合防災訓練に参加するとともに、トリアージ訓練を受けている。今後、災害時における医療救護の拠点のひとつとしてより良い活動ができるよう態勢を整えていく必要がある。